

山雞之屬卵十二三、皆夏月則十八日、冬月則二十二三日而孚化、後七十五日而能自嚼矣、蓋卵形如玉、故俗稱玉子、卵中黃曰穀音、

凡雞卵忌山椒、誤貯於一處、則卵盡腐爛、

穀音

鳥卵空也、本綱曰、吉弟之膏至輕利、以銅及瓦器盛之、則浸出、惟雞卵穀盛之不漏、又云、其脂以

琉璃瓶盛之、更以樟木盒貯之、不爾則透氣失去也、吉弟蛇屬、瑠璃硝子、

〔萬葉集九雜歌〕詠霍公鳥

鶯之生卵乃中爾霍公鳥獨所生而已シガチ、ニニテハナカズ、シガハ、ニニテハナカズ、爾似而者不鳴已、母爾似而者不鳴、○下

〔日本靈異記中〕常鳥卵煮食以現得惡死報緣第十

和泉國和泉郡下痛脚村有一中男、姓名未詳也、天年邪見不信因果、常求鳥卵煮食爲業、天平勝寶六年甲午春三月、不知兵士來告中男言、國司召也、見兵士腰負四尺杜、即副共往、纔至郡部內於山直里、押入麥島、島一町餘、麥生二尺許、眼見燭火踐足無間、走廻島內、而叫哭曰、熱哉々々、時有當村人入山、拾薪見於走轉、哭叫之人自山下、來執之、而引拒、不所引、猶強追捉、乃從籬之外牽之、而出、躡地而臥、嘿然不曰、良久蘇起、然病叫言痛足矣云々、山人問言、何故然也、答曰、有一兵士召我將來、押入燭火燒足、如煮、見四方者皆衛火山、無間所出、故叫走廻、山人聞之、褰袴見膊、膊肉爛銷、其骨環在、唯逕之一日而死也、誠知地獄現在、應信因果、不可如鳥之慈已兒、而食他兒、無慈悲者、雖人如鳥矣、涅槃經云、雖復人獸尊卑差別、寶命重死、二俱無異云々、善惡因果經云、今身燒煮鷄子者、死墮灰河地獄者、其斯謂之矣、

〔空穂物語藤原の君〕宰相めづらしくいできたるかりのこにかきつく、

かひのうち、に命こめたるかりのこは、君がやどにてかへさるらん、とてひごろはとてこれなかのおとゞにて、君ひとりみ給へ、人にみせ給なとて、とらせ給へば、兵衛うちらひて、かばかりにおやうみつくらん、人のやうにもこそつかうまつれば、いでかばかりぞかし、御心はとの給、